

Symposium V: 中国鬼神論の最前線

鬼神研究の現状と課題

—社会通念としての鬼神観を研究する立場から—

佐々木 聡

有史以来、「鬼神」は中国のあらゆる思想・信仰の根幹的概念として語られ、論じられてきた。それゆえに鬼神に関する研究は非常に多岐にわたり、簡単には整理できないが、大よそ次のような方向性を挙げることができよう。すなわち、①哲学分野における所謂「鬼神論」の研究（ex. 墨家の有鬼論、王充の鬼神論、朱子の鬼神論 etc.）、②文学分野における鬼神表象の研究（ex. 志怪・伝奇や長編小説、清朝志怪などに登場する鬼神 etc.）、③宗教社会史分野における鬼神研究（ex. 仏典・道経に見える鬼神、祭祀儀礼や呪符・占書に見える鬼神、風俗史料に見える鬼神 etc.）、④出土文献に拠る鬼神研究（ex. 出土文献・鎮墓文・敦煌文献などに見える鬼神 etc.）、⑤画像資料に拠る鬼神研究（ex. 画像石・敦煌壁画・鎮墓獸・その他美術資料などの鬼神表象 etc.）などの方向性である。

報告者はこうした研究成果を横断的に参照しながら、一種の社会通念としての鬼神観研究を進めてきた。その中で特に着目したのが、祥瑞・災異と鬼神の関係である。漢代以降、国家理念となる祥瑞災異思想では、その前提に天人相関思想があることから天と人の関係に力点が置かれ、その中間に在る鬼神はあまり語られない。従来の研究でも、祥瑞・災異は儒教や政治思想の文脈で取り上げられ、鬼神研究と直接結びつくことは少なかった。しかし、より広く基層社会を概観したとき、通俗的な文脈で語られる鬼神は、密接に怪異や災禍と結びつけられる。さらにこうした鬼神観は、祥瑞災異思想と必ずしも矛盾せず、通底する場合も多い。例えば、俗信を批判した王充の「妖祥」論などからも、そうした志向性が窺える。

本報告では、こうした鬼神観の在り方を考える上で重要となる近年の研究動向につき、主に社会史研究を中心に上げ、今後の鬼神研究に向けて報告者なりの問題提起を行ってみたい。

死人と鬼

—戦国秦漢の墓葬文書における死後世界の敵対性と親和性—

池澤 優

1986年に甘肅省天水放馬灘一号秦墓から出土した「丹」は、一度死んで蘇生した主人公が死者祭祀のやり方について指南するという内容であるが、その中に死者について奇妙な表現がある。「墓を祠る者は敢えて哭する毋れ。哭すれば、鬼は去り敬(驚)き走ぐ。已に賸^にを収めればこれを釐^すめよ、此の如くすれば、鬼は終身食わざるなり。」前半は墓祭において哭すると鬼(死者)は供物に与れないので哭するなということ、素直に理解できる。しかし、後半は供物を供えた後、撤収せよ、そうすれば鬼は供物に与れないからとの趣旨で、鬼が供物に与れないようにするのは死者祭祀の意義と根本的に矛盾する。

この謎は2012年に発表された北京大学蔵秦簡『泰原有死者』を見ることで比較的容易に解ける。この資料も蘇生した人間が死後世界について語る内容だが、その中に「死人に予えし衣を……産見せしめよ。産見せざれば、鬼は輒ち奪いて、これを少内に入れん。」「死人の冢を祭るに……其の食を已^おえるを須^まちて、乃ちこれに哭せ。其の食を已^まえずしてこれに哭さば、鬼は輒ち奪いてこれを廚に入れん。」という表現がある。ここでは「死人」と「鬼」は明瞭に別の存在であり、「鬼」は冥界の官吏もしくは冥界で暮らす祖先以外の死者のこと(どちらであるかを特定することは困難)だと判断できる。

実は、これと同様の区別は後漢時代の鎮墓文においても「前死者」と「後死」という形で表現されている。「前死者」は「丘丞墓伯、地下二千石」の冥吏から始まり、墓域中の古い死者に至るまでの冥界の諸存在であり、そこに新しい死者が加わるのであるが、同時に新しい死者の埋葬は古い死者の安寧を侵すと考えられたと思われ、鎮墓文では「冢中の先人をして驚くなく恐れるなく、安穩なること故の如くならしめ」ることが祈られる。

つまり、戦国秦漢時代の死後世界観においては、新しい死者の埋葬は既に鎮まった古い死者たちの安寧を侵す厄介な出来事ととらえられていたのであろう。換言するなら、古い死者と新しい死者の間には潜在的な緊張関係(敵対性)が存在したということである。もちろん、人間が死すべき存在である以上は、死を回避

することはできない。とすれば、唯一の方法は古い死者たちに新しい死者を認知し受け入れてもらうしかない。鎮墓文には複数の機能があり、特定の凶日に死んだために邪悪な存在と化した死者を排除する（生死の断絶）のが主要なテーマではあったが、冥界による死者の受容（親和性）もそれとならぶテーマだったといえることができる。

本発表においては、鎮墓文だけでなく、漢代の買地券や告地文でも死者の受容が大きなテーマであったことを論じたい。

「陽鬼」と「赤鬼」—六朝時代までの中國鬼觀念の一側面

王 旭東

本報告は、近世に定着した「幽陰的」鬼の認識、つまり鬼（幽靈）は暗闇を好み、色は黒く、陰濕で冷たいという認識とは相反する「陽」の性質をもった鬼・赤色の鬼の觀念が、六朝時代まで廣く存在していた事實を紹介する。

『墨子』卷八「明鬼下」は二つの怨靈復讐譚を記載する。いずれも無實の罪で殺された者の幽靈が、真昼間に現れ、朱色の杖や弓矢を用いて仇敵を殺害する。一方の杜伯は弓矢に加え、朱の衣冠を身に着けていたと記される。

王充『論衡』「訂鬼篇」には、「鬼は陽の氣からなるものである。ゆえに世間の人が見る鬼はみな真赤（純朱）である」という記述があり、同書「言毒篇」は杜伯の故事に觸れ、「鬼の持ち物は陽火の類である。ゆえに杜伯の弓矢は赤い」と述べている。このように鬼やその身に着けるものが赤いと記されるもの、あるいは鬼が燃え盛る炎を伴って現れるという記述は、六朝志怪に多數見つけることができる。これは怨靈の怒りに對する人間の恐れが、觸れたものを焼き破壊する「火」と、炎の赤に具現化したものと考えられる。

一方六朝の文獻には、鬼を陰的なものとして記述する例もある。死者は、死後直ぐに冷たくなり、地下に埋葬されるという經驗的事實から、幽鬼を陰的なものと捉えるのは自然なことであろう。六朝の鬼の觀念には、陰陽二種の鬼が、異なる原理に基づき併存していた。しかし鬼の「陽」の性質と赤い鬼のイメージは、唐代以降殆ど忘れられてしまう。その結果唐代の詩や傳奇小説には、冷たく青白い「鬼火」の描寫が現れる。この火にはもはや人間を焼き滅ぼす力はない。鬼は人間を直接的・物理的に苦しめることで恐れられるものではなく、いつの間にか人間を侵食し、呑み込んでいく、不可知の闇の存在を暗示することで、恐怖を與えるものとなる。「鬼火」は六朝と唐の間に起こった鬼の觀念の大きな變化を鮮明に示すものである。

仏教化した冥界における幽鬼の鬼と異形の鬼

佐野 誠子

南北朝時代から隋唐への交代の間に、中国の冥界の様子は大きく変わった。仏教徒は、仏教伝来当初、中国在来の冥界である泰山を利用して、中国式の地獄をつくりあげた。しかし、仏教が中国に浸透していくなかで、冥界における仏教の色彩はより濃厚になっていき、地獄に関する偽経も作られ、また十王信仰も生まれた。

ここまでは、今までもよく論じられてきたことである。今回の報告で問題としたいのは、仏教化した冥界における鬼の位置付けである。中国での“鬼”の語は、周知の通り、死者がなる幽鬼を主に指す。しかし、異形の姿をした怪物・妖怪的なものを指して鬼と呼ぶこともある。

十王図など冥界を描いた図像では、冥界の審判者および、その周囲にいる書記官は、衣服をまとった人間に近い姿で描かれ、死者に刑罰を加える存在は半裸の異形の姿で描かれることがほとんどである。

伝統的な泰山をはじめとする中国の冥界においては、死者は、冥界において官吏となり、また新たに死ぬ人間を冥界に連行する使者となった。それが、仏教の影響を受けた地獄においては、死者は懲罰を受けるか、生き返るか、転生するかである。冥界の支配者が、在来の泰山府君であったところが、閻羅王に置き換えられていったことは、よく知られている。また、地獄を支える人員として、審判者を支える役人、また、刑罰を与える牛頭や鬼のようなものが描かれることもある。彼らはいったいどこから来たのだろうか。

南朝で書かれた趙泰の地獄めぐりの記事を出発点にし、唐代の仏教志怪である唐臨『冥報記』、蕭瑀『金剛般若経靈驗記』、また同じく唐代の一般の志怪ながら、冥界絡みの記事を多く含む戴孚『広異記』、牛勣『紀聞』を中心素材としつつ、敦煌の図像や、時代は下るが十王図などを補助として、仏教化した冥界（地獄）における鬼の位置付けとイメージについて検討したい。

張鷟『朝野僉載』について

—唐代張氏一族の小説制作を見据えながら—

溝部 良恵

白行簡「李娃伝」や元稹「鶯鶯伝」など中唐期の伝奇を代表する作品は、白居易、元稹の周辺で書かれており、家族や友人との交流関係が小説制作と密接な関係にあったことが窺われる。こうした中、『朝野僉載』、『遊仙窟』で知られる張鷟をはじめとする張氏一族の小説制作は注目に値する。張鷟の孫、張薦は中唐期に『靈怪集』を、さらに張薦の孫、張誥は晩唐期に『宣室志』を編んでおり、制作の背景には、家庭環境の影響が推測できる。しかし従来は各小説集に着目することが多く、張氏一族の小説制作、作品の継承関係という観点からの考察は多くなかった。

そこで本発表では、張氏一族の小説制作の過程解明という大きな課題を見据えつつ、まず張鷟『朝野僉載』の分析を行ってみたい。『朝野僉載』には武后期の暴政に関する話から鬼や再生に関する所謂志怪風の話まで、多岐にわたる話が収められている。このためこの書は、歴史書として扱われる一方、信憑性に欠ける話も多い歴史と小説の間にあるような書と見做されて、それぞれの角度から分析が行われてきたが、それらを統合した全体的な性質を考えるという点に関しては、まだ考察の余地があると思われる。『朝野僉載』の鬼や再生など志怪風の話の多くは、張鷟や友人の官職に関係する話が多く、時には、張鷟自身の感想、評価が記され、張鷟が不思議な話を信じている様子が窺われる。一方で武后期の暴政を記録し、批判する姿勢からは、官僚としての冷静さ、強い正義感が感じられる。一見、矛盾するような姿勢であるが、そこに通底するのは、張鷟の新興科挙官僚としての価値観ではないかと思われる。こうしたことを手がかりに、そのほか『朝野僉載』中の婦人に関する話、商人など様々な階層の人々の話や張鷟のもう一つの著作『遊仙窟』にも触れながら、『朝野僉載』の性質について考えるとともに、それらが張薦『靈怪集』や張誥『宣室志』にどのような影響を与えたのかを考察したい。

『聊齋志異』 「章阿端」 における冥界の構造

福田 素子

清・蒲松齡『聊齋志異』会校本卷五「章阿端」の中に描かれる冥界には、金銭や、金銭で動く役人たちといった、中国の冥界譚でおなじみの要素に混じって「死者の死」が描かれる。死んだ死者は、あるいは「聾」となり、鬼が人に崇るように、鬼に崇る。

死者は一般的には更に死ぬとは考えられず、輪廻を経て現世に戻ることに、あるいは再生することは「死者の死」とは認識されないのが普通である。崇る霊を慰撫し、超度しなければならぬことも、地獄の死者が責め苦から逃れられないことも、死者がもう死なないという前提があって成り立っている。死者が死ぬとは、どういうことなのか。

中国における「死者の死」という観念は、少なくとも秦代の睡虎地秦簡『日書』にまで遡ることが出来、道教経典には鬼を殺すための殺鬼呪がみえる。いずれも悪鬼を殺害するものであるが、父祖の霊ならばともかく、縁もゆかりもない悪鬼であれば、怨みを解いて超度するといった手間をかけるよりも、害獣を駆除するように手っ取り早く消してしまいたい、という考えが生み出したものであるといえる。しかし「章阿端」においては、「死者の死」は有用性のために存在するものではない。聾を含む死んだ死者は、人にとっての鬼と同じく祓い、超度すべきものであり、しかもその儀式をとり行う鬼の宗教者たちは、金銭の支払いを要求する。つまり鬼と聾の関係は、人と鬼の関係を反復しており、「章阿端」において幽明界は少なくとも三層の入れ子構造をなしているのである。

比較のため、袁枚『子不語』卷三「城隍殺鬼不許為聾」における「死者の死」についても考察する。同作では「章阿端」のような革新的な幽明世界の構造こそ描かれないものの、悪霊を腰斬に処すると、切り口から黒気が流れ出て、黒気を扇ぎ散らすと死者が「死ぬ」といった、身体性レベルの「死者の死」の描写が追求されている。